

こころと魔物

前田 あかり

先生を死ぬまで悩ませ苦しめ、最後には自殺にまで追い込んだKの死には一体どういう意味が込められているのかを知りたくて、私は何度も何度も本を読んだ。読めば読むほどその経緯の難しく、また面白いように感動させられたのだが、結局のところ、Kは先生への復讐を行うことを主な目的として自殺に踏み切ったのではないかと考えた。Kの亡骸や遺書を見た先生の反応や遺書の内容から読み取れることがそれを物語っていると思う。

Kは、遺書に先生やお嬢さんの名前を書かなかった。こうすることで、説明の機会、後悔の念やこころの声のほけ口を先生から奪ったのだ。そして、この出来事や自分の犯した罪をずっと一人で抱えさせることに成功した。告白できずにいる先生を、草葉の陰からずっと嘲笑し続けることができるように仕向けたのだ。自分の卑怯さを認め、それを告白し謝るために奥さん（お嬢さん）に言ったとしてもそれはそれで先生には罪悪感が残る。お嬢さんの名前をあえて書かないことでお嬢さんが傷つかないように取計らったKの想いを台無しにすることになるからだ。かつては良い友だったのだから、先生の真面目な性格をKもわかっていたはずだ。自分の名前がないということは、Kの死は自分とは関係ないから忘れよう、と先生が思うことはないかと踏んだのだろうか。言うにも言えず、言わないなら言わないで後悔の念を一生抱え続けるという呪われた余生を先生に与えてこの世を去ったのではないだろうか。「もう取り返しが付かないという黒い光が、私の未来を貫いて、一瞬間に私の前に横わる全生涯を物凄く照らしました。」「この表現は本当に恐ろしく、また素晴らしいと思う。先生が遺書を読んだ後、畳み掛けるように先生の目に飛び込んできたKの血の描写、特にそれが襖についていた部分はま

たユークだ。二人の下宿先において、言葉のやりとりは主に襖を介して行われていた。そして、襖が開くのはもっぱらKが先生になにか伝えたいことがある場合だった。二人のこころのやりとりの中でキーポイントとなっていた襖に血を付けることで、Kは先生によって傷付けられた自分のこころのようすを表わしたのではないだろうか。さらに、遺体の片付けも頼むことで、自分の負った傷に背をむけることなく、自分が呪った先生の余生いっばいをかけて先生が犯した罪や先生のこころの卑劣さ、弱さに向き合わせようとしたということも考えられる。しかし、彼自身が遺書で述べていたように、「薄志弱行で到底行先の望みがない……」と思っただけから自殺に踏み切っただけで、先生やお嬢さんとのことは本当に関係ないのかもしれないと思っただけで、Kが、前記のような思惑を、命をかけてまで遂行するほど先生を恨んでいたのかどうかはやはりどこにも書かれていないし、そもそもこういった行為はKらしくないからだ。そこで、Kの行動や言動、考え方をずっと追ってみた。すると、Kはある時期に著しく変わり、今までのKではもうなくなつた、文中の言葉を借れば「平生のKではなくなつた」ようすが見えてきた。それは、Kが自分の恋に気づいた後、それに本気で悩み始めた時だと思ふ。言葉を変えれば、この時からKのこころは魔物に支配されてしまつていたということだ。目指していた道や苦勞して励んでいた精進などを全て切り捨てることを選択してまで貫くと決めたお嬢さんへの恋心を裏切りによって斬り捨てた先生に対して元来のKでは考えられないような復讐法を練ることになつたのは決して理解しがたいことではないのではないだろうか。先生にとっては得体の知れない、強そうでも恐ろしいKが魔物として先生のこころにはびこつてた。Kにとつての魔物は、今まで取るに足らない、不必要なものである（人間らしさや恋、女性そのものだったのだと思ふ。これらについての知識を全く持ち合わせていなかったKにそれを制御することは不可能で、この魔物がKを苦しめと憎しみ、そして痛みに溢れた自殺へと導いたのではないだろうか。

ここで述べたKの恨みや先生への復讐法はとても恐ろしい。この本を読み直すたび、考えるたびにいろいろな考え方が浮かんできて、毎回深く

考えることができる。書かれた時代と今とでは、価値観や言葉遣い、世の中のシステムなどまでぜんぜん違うはずなのに、共感や感動をたっぷり与えてくれる漱石はまるで魔法使いのようだ。幅広い世代から今でも愛される漱石の本には、私も小さい頃から慣れ親しんできた。部屋の本にある本棚には、『吾輩は猫である』や『坊っちゃん』、『三四郎』などがまだしまっている。この本を深く読んだことで視野が広がった今、もう一度これらの本を引っ張り出して、今度は少し違った視点で楽しんでみたいと思う。

(広尾学園高等学校)

優秀賞

無自覚な小悪魔

若森 樹里亜

私は今回、夏目漱石の『ころ』を読んで登場人物一人一人の心の描写がずっしりと心に響き、完読後何日か重い石が頭に残っているような感覚がした。特に、奥さんの存在が私に気になって仕方なかった。作中で目立つのはKと先生の関係であり、お嬢さんが渦中の真中にいるのにも関わらず、あまり語られない。しかし、先生の語るお嬢さんの行動で、人物像を捉えることができる。それを踏まえた上で、疑問に思うこともあった。

まず、お嬢さんはKと先生、どちらが好きだったのか、Kと二人きりで話したり、カルタでKの味方をするなど、恋愛感情を持った相手に

するようなことを二人はしている。正直私も読み終えて考え直すまで、お嬢さんはKが好きだったのではないかと考えていた。しかしこの考えでは矛盾する場面がある。Kとお嬢さんが話す部屋を通り抜け、疑問に思いながらも聞けずいた先生に、お嬢さんは「変な人」と言い、その前は先生の姿を見つけて笑い出すなど、暗に「嫉妬しているの?」と言っている。二人で帰ってくる場所を偶然見つけた先生は、一緒に家を出たのかと聞き、お嬢さんは「嫌な例の笑い方」をする。先生が結婚を申し入れた際、奥さんは「本人が夫承知のところへ、私があの子をやるはずがありませんから」と言う。つまり、奥さんは既に「あなたはどこを選ぼう?」といった趣旨の質問をしていたことになる。お嬢さんは先生を選んでいたわけであるから、お嬢さんは先生が好きで、Kへの思わせぶりな行動は意中の人の嫉妬を買おうとしたお嬢さんの策なのだろう。

これを踏まえた上で、お嬢さんは無自覚な小悪魔だと言える。普通、Kの立場にいる男性なら、女性の自分に構ってくるような態度を目の当たりにすれば、自分が好きなのではないかと勘違いするのは必然的なことだ。Kと先生、二人の男心をくすぐらせる態度をとるお嬢さんは否定なしの小悪魔だ。しかしお嬢さんは、自分は小悪魔だという自覚はない。奥さんは「なぜ先生が変わってしまったのか分からない」と言っているが、自分が男たちの関係を狂わせたという自覚があるなら、二人の間に何が起きたのかくらいは察する(実は奥さんは何が起きたか知っていると思うが)。先生も実はお嬢さんのこの「無自覚さ」は感じていた。先生は遺書に「妻が己の過去に対してもつ記憶を、なるべく純白に保存しておいてやりたい」と述べている。しかし普通、先生の醜い過去を知ったことによりお嬢さん自身が汚れることはない。つまり、妻が心を弄んだ事実を、無自覚のまま得意させたかった。Kが恋によって外れてしまった自分を断罪したのと同じように、先生も己の罪と一緒に奥さんの罪も背負って死ぬ決断をする。ゆえに、「私」に妻には言うなと頼むのである。無自覚で偽善と小悪魔な要素がある奥さんは結果的にKと先生を狂わせた要因の人物である。

私には、奥さんが先生とKの間に起ったことを知らないことが、不思議

恐ろしきの塊

アズマイン タミム

議ではない。こんな策士であるお嬢さんが、彼ら二人の間にあった出来事を察しないわけがない。奥さんは先生が変わってしまった原因に心当たりがあると言う。「ええ。もしそれが原因だとすれば、私の責任だけはなくならぬだから」。その原因と言うのは先生の友人であったKの「変死」であるが、何も知らないはずなら、奥さんにとってKは「借家に下宿していた夫の友人」であり、他の何者でもない。ここで奥さんが言う「責任」というのは色恋沙汰を察した上の発言ではないだろうか。

それに、女はこんなに鈍感な生き物ではない。現代の女社会に生きる私も周りの、女ならではの観察力と勘を感じることもある。この小説の舞台は明治末期であり、女性の認識は今とは違ったのかも知れない。昔からすれば女性は「おしとやか」で「守るべき」存在だったのであろう。当時にしては革新的な考えを持っていた先生でも、少し「女」を侮っている。私が解釈した「純白」は、奥さんが自身の罪の自覚がないことだから何が起きたかを感じ取っている場合、奥さんは純白ではなくなる。察している先生に言わないのは彼女自身も怖いからなのではないだろうか？

先生が言わない限り、奥さんも言い出せない。関係が壊れてしまうのは怖い。男でも女でも、今も昔もその点では変わらない。

この小説は、奥さんは渦中の外にいると思われがちだが、実は一番のキーパーソンだと思う。Kも先生も一人の女性の手の上に転がされたようなものだ。無自覚に心を弄ぶ奥さんに踊らされたKと先生が少し滑稽に思える。それと同時に、愛がもたらす残酷な最後に衝撃を受けた。この小説は決して三人の男女関係を描いたロマンチックな恋愛小説ではない。当時からある女の固定観念を無視し、人間そのものを表わすことのできた夏目漱石の『ころ』は、現代に通ずるものがあると思う。

(広尾学園高等学校)

夏目漱石の代表作の一つ「ころ」は、明治時代に西洋から持ち込まれた自己愛(エゴイズム)をテーマとした作品である。日本の近代化が進むたびに孤独が増えて、「武士道の精神にはなかった価値観が人をダメにするかもしれない・孤独にさせるかもしれないことを夏目漱石は論じたかった」。

「恋は罪悪だ」と先生は物語の中で言っていた。初めて読んだ時、「人」はどのような経験をしたらこのような言葉を発することができるか、疑問に思っていた。「私は淋しい人間です」のような、まるで中二病にでもかかったかのような言い訳を繰り返して、人間に対して絶望感を抱き続けるところに、かわいそうではなく、ただの怠惰だと思っていた。世の中には善人や悪人と呼んでいい人はたくさんいる。悪人がいなかったら、すべての人間が善人になることになるので、善人の定義がなくなる。こういう善人と悪人と交流し、傷つけられ、助けられ、人間は成長できるのだと思っていた。世の悪に呆れて自ら人から遠ざかって、人と接さないことにするのは子供っぽいと思っていた。子供が拗ねて「もう知らない」と言っているかのように、その問題に対して何の行動も取らず、世間を批判し続けるのは、ただの不精だと思っていた。悪と善両方存在するところが人間の美しきの一つだと考えていた。のちに先生の遺書を読んでいる間、私の先生に対する考え方が変わっていった。私の「世間」に対する考え方が甘かったと思った。私は先生が主人公に話したように、「君は過去を持つにはまだ若い」という言葉を思い出した。私は先生のように、人に対して疑心暗鬼になってしまう経験はまだない。恵まれている人の一人である私は、周りに先生のレベルまで傷つける人はいない。先生の遺書を読んで私の先生に対する印象が変わっていった。

夏目漱石いわく、近代社会のエゴイズムでは他人を傷つけ続けるせいで、人は孤独になり、特に先生のように悪に對して敏感な人は人を信じられなくなる、ということが伝わった。漱石は先生とKの、お嬢さんを巡って行われた心理戦を利用して、人間のこころを批判していた。高尚な愛の理論家であると同時に、最も迂遠な愛の実際家だったとはただの綺麗事で、実際はKの「恐ろしさの塊」を感じてから、愛の実際家でもないし、理論家でもなくなった。後悔、この場合、Kからお嬢さんへの気持ちについて語られ、自分のチャンスを失った後悔とKへの嫉妬や負け、苦しさが先生のこころを覆い、数日前まであった道徳が消え去った。先生がその後、図書館の帰り道でKのこころにとどめを刺し、Kの気持ちを分かった上で勝手に奥さんにお嬢さんへの気持ちを伝えた。人間のエゴイズムは、モラルなどを消し去り、人は自分の利益を確保するために他人を追い詰め、最終的に死まで押し付けるかもしれない、ということだ。先生はお嬢さんと結婚できた代償に友人を自殺まで追い詰めた。第一章に戻ってみると、先生はさらに孤独になっていて、人と関わりを避け、孤独の道を歩んでいた。Kの遺書が先生とお嬢さんの話題に触れていなかったため、先生にしか自殺の原因がわからない。先生を責める人がいないと同時に、先生は自分が犯した罪を一生償うことができない。誰も知らないから償う理由がない。言うとしても、今更その話題を持ち上げる理由がない。先生のこころからこの罪を被う事がもうできない。Kが残したこの怨念と一生を生きる事になり、先生はさらに孤独になっていく。この孤独の連鎖は人間のエゴから始まり、エゴをこころから消すか、抑えなければ人を巻き込み続ける。夏目漱石はこう伝えたかったかもしれない。

私が第一章を読んでいた時の人生と生きる意味についての考え方が甘かった。人間は傷つけられるからこそ成長でき、立派な人生を終えるのが人生の目標だ、と考えていた私は経験が足りないかと改めて思った。人生はそう甘くない。樂觀的な考え方をし続けると人をさらに傷つけていき、死まで至るかもしれない。自己成長をいいわけにして人を傷つけるのも自己中心的な考え方の一つなのだ。先生は中二病になどかか

つていなかった。世の中の悪の原因に気付き、心のそこから人間のこころを批判していた。愛と金とエゴは人間の道徳を狂わせていき、なめてはいけない本当の意味での「恐ろしさの塊」だ。

近代化する社会に伴い、人間は自分自身を最優先的に考え、周りを破滅させている。夏目漱石は病気をテーマとする本を何冊も出していた。エゴイズムもその病気の一つかもしれない。

(広尾学園高等学校)

優秀賞

「こころ」の本当の主人公

池亀 茉有子

「こころ」の主人公は実は「K」である。「いざといふ間際に、急に悪人に変はるんだから、恐ろしいのです。」と「先生」は「私」に言った。「先生」は人間、特に自分自身のことを言っているつもりだが、これは「K」が一番あてはまるのではないだろうか。

そもそも、「先生」は罪の意識にとらわれすぎである。彼はわるくない。少し姑息な手を使ったかもしれないが、自分の欲望に忠実で、読んですがすがしい。気にくわなのは「K」だ。良い人に見せかけて結局は自分しかみえていない。自分の好きな人を、信頼していた友人がとつた。それでも結婚をきちんと祝福し、静かに身を引く。ここまでは完璧、花丸だ。が、自殺はいけない。自殺するぐらいなら最初からがんが「お嬢さん」にアピールしてほしかった。いままでのかっこいい「K」が台無

しだ。こんな人になりたい、と憧れさえ抱いていたのに。残していく人たちのことを彼は考えたのだろうか。

「K」はずるい。自殺したら「先生」が責任を感じるに決まっているではないか。遺書がずいぶんあっさりしていて「お嬢さん」の名前が一切出されないのも、彼なりの気の遣い方なのか。違う。彼は、わざとそれをねらったのではないか。「先生」の後味が悪くなるように。「先生」が「お嬢さん」と結婚してもずっと罪の意識に悩まされるように。

「先生」の告白をきくと、彼が悪者のようにみえるのは確かだが、彼は自分に正直で「K」より何倍もましだ。「K」に切ない恋を打ち明けられたとき、「先生」はうわべだけの応援をするわけでもなく、利害を考えるわけでもなく、ただひたすら呆然としていた。良い人を演じようとしていない。それなのに「K」は迷惑も顧みず、下宿先で「奥さん」と「お嬢さん」からするとかなり謎な自殺。一見、友人に好きな人を譲った悲しく心優しい青年だが、実際は自分勝手だ。

こんなに「K」が気に入らないのは、彼がどこかわたしと重なる部分があるからだろう。高みをめざすわりに、大事などころでは勇氣とふんばりが足らない。しつかりしないと、いつも思う。だから、「お嬢さん」を好きなあまり友人を裏切ってしまう「先生」の大胆な行動もひどい、というよりむしろすごいな、と思うことができるのだと思う。

もちろん、このわたしの考えには反対意見がたくさん出るだろうし、それが「こころ」のだいご味でもあるのだろう。「こころ」の本題である人間の微妙な気持ちの揺れ動き、複雑な絡み合い、を「先生」の告白を通して、漱石は伝えたかったのかもしれない。だから「先生」が主人公だと考えるのも筋は通っている。しかし、わたしにはどうしても「K」が主人公に思える。彼は人間の良心的、それでいて利己主義的な部分を最もうまく表している。彼こそが「こころ」の本当の主役であり、「先生」は、いい人すぎるあまり自分の犯した「罪」とも言えない、「小さな小さな裏切り」にさいなまれる脇役なのである。

主役、脇役、と書いたが、この小説に個人名は一切でてこない。つまり、この小説は誰にもあてはまる普遍的なものなのだ。誰もが共感でき、

考えるものがそれぞれにあるからこそ、この作品は長い間名作として読まれているのではないだろうか。

(渋谷教育学園渋谷高等学校)

優秀賞

陽と陰

日隈 結音

私は夏目漱石の「こころ」を読んだ時、なんて人間臭い本だろう、と思った。私が趣味として読む本は、物語が凝っていてどんどん読み進めてしまうようなものが多いが、この本ほど登場人物に人間味を感じる本を読んだことはなかった。

それと同時に、ある疑問が私の中に残った。なぜKの自殺から何年も経った今、先生は罪を償うための自殺を決意したのか。

結論から言ってしまうと、おそらく先生は、「私」をKに重ね合わせたのだと思う。Kのように自分を信頼し、悩みことを打ち明けてくれたり慕ってくれる「私」を見るのが辛くなったのだ。

まず、なぜ先生が普通の人である「私」に最終的に手紙の中では心を開き、昔あったことを全て伝えたのか。先生の奥さんさえも知らなかったようなことをなぜ「私」にだけ懺悔したのか。確証は得られないが、私は「私」が純粹で無知でつまらぬ「普通の人」だからこそ教えたのだと思っている。人並みに勉強をして上京し大学へ行き、人並みの好奇心や疑問を持って先生と関わる、いわゆる一般人だ。奥さんの供述や先

生の手紙によると、先生は昔「私」と同じような「普通の人」だったようだ。強いて言うなら家庭環境は複雑で勉強こそ出来たが、普通に愉快なことをしたり恋をしたりするような、街で探したらよくいるような人だ。そんな先生が心を閉ざしてしまったのは友人のKの自殺が理由だった。Kの信頼を裏切る形で後先生の奥さんになる「お嬢さん」との結婚の許可を求め、恋を実らせたことに対して後ろめたさを感じ、Kの自殺は自分の責任だ、と一人で重い十字架を背負うことになった。そこに現れたのが主人公である「私」だ。「私」は「先生」に純粹に惹かれ、次第に家に遊びに行くような仲になるが、先生が隠し持っている闇に興味と疑問を持って探るようになる。しかし、結局それを知ることになるのは先生の死後、遺書の手紙を読んでからになってしまう。私の印象としての「私」は先ほども述べたが、典型的な一般人だった。まささらに無知な状態の「私」の目を通してこの物語を読み進めることで、私たち読者は偏見やバイアスを持つことなく他の登場人物を見ることが出来る。さらに、個性が強い登場人物が出てくる中で「私」がいることによつて、読者の中で一定の基準を保つことが出来ると感じた。

この「私」と関わり始めた時は、先生は完全に心を閉ざしていた。自分の過去をほのめかすような話をして現実を分からせ、自分から遠ざけようとしたが、「私」は全く変わることはなく、むしろどんどん自分を信用するようになった。また、先生にとつても「私」の存在が少しずつ大きくなり、Kの惨事と同じことが起こりつとあると悟り始めた。

友人の死の責任を背負いながら自宅でひっそりと暮らす先生を「陰」とすると、先生から見た「私」はまさに「陽」の存在である。外の世界で居場所があり、若くてまだまだ希望がある。随分昔に「陽」の存在として生きることを諦め、長い間暗いものを心に抱えて生きてきた先生にとつて、「私」は眩しすぎたのだと思う。自分が光輝いていることを自覚していない人ほど、闇を抱えて生きることを決意した人にとつて残酷で危険なものはない。人が太陽を直接は見るのが出来ないように、先生も「私」に手が届かなくなつたのだと思う。苦しんだ末、これ以上自分のせいで無実な人を傷つけたり汚すようなことはしたくない、と自害

を決意したのではないだろうか。

この本を読んで、「陽」の存在である人はアイドルのようにキラキラと輝いている人だけではなく、個人の解釈でどんなに世間からしてみれば普通に見える人でも「陽」の存在になりうるのだな、と思った。また、必ずしも「陽」の人が「陰」の人を救える訳ではなく、むしろ一層陰を濃くしてしまうこともあるのだと知った。それぞれの人が今の自分になつた理由には様々な葛藤や試行錯誤が潜んでいるのだから、そこに必要以上干渉しすぎるのも良くないのかもしれない。

(渋谷教育学園渋谷高等学校)